

子供と馬の話

小川未明

青空文庫

九月がつついたち一日の大地震おおじしんのために、東とうきよう京・横よこはま浜、この二つ
 の大きな都市とおとをはじめ、関かんとう東一帯たいの建物たてものは、あるいは壊こわれた
 り、あるいは焼やけたりしてしまいました。そして、たくさんな人に
んげん間まが死しにましたことは、もうみんなの知しっていることだと思おもい
 ます。いままで動うごいていた汽車きしやはトンネルやレールが破は壊かいしたた
 めに、もう往おうらい来らいができなくなりました。また、毎まいばん晩はな華なやかな
まち街まちを照てらしていた電でんとう燈とうは、装そうち置ちが壊こわれてしまったために、その
のち後ち、幾いくにち日にちというものは、都みやこじゆうが真まつ暗くらになり、夜よるは、ラン
 プをつけたり、ろうそくをともしなければなりませんでした。

そんなように、いままでつごうがよく、便べんり利りであつたものが、

すっかり狂くるってしまつて、三十年ねんも四十年ねんも昔むかしに帰かえつたように、不便ふべんなみじめな有あり様さまになつたのでありました。

こういうめにあいますと、いままで、便利べんりな生活せいかつをなんでもなく思おもつていた人々ひとびとははじめて、平和へいわな日ひのことにありがたみを感じかんしたのであります。そして、また、それが昔むかしのようになるのには、どれほど、多おほくの勞ろうりよく力ちからと日にっすう数すうとがかからなければ、ならぬかということを知しつたのであります。

わたし
私わたしたちは、けつして、ひとりでに、この世よの中なかが便利べんりに、文ぶん明めいになつたと思おもつてはいけません。たとえば、一つのトンネルを掘ほるにも、どれほど、多おほくの人ひとたちが、そのために苦くるしみ働はたらいたかかんがを考えなければならぬのです。

また、電気が、にぎやかな街々につくのも、てんでの家にきたのも、そこには、たくさんな人たちの労働力とそれに費やされた日数があつたことを考えなければなりません。

こうして、この世の中は、みんなの力によつて、文明になり、つごうがよくゆき、そして平和が保たれてきたのであります。

けつして、自分独りが、どんなに富裕であつても、また学問があつても、この世の中は、すこしもつごうよくいくものでもなければ、また文明になるものでもないことをよく知らなければなりません。それを知るには、こんどの災害はいい機会といつていいのです。

それですから、困っている人たちを困らない人たちは救わなけ

ればなりません。そして、いままでのように、みんなが自分の才能いのうをふるって、この世よの中なかのために有益ゆうえきに働はたらき、ますますつごうがよくいくように早はやくしなければならぬのだと思おもいました。もう一つ、この機き会かいに、私わたしたちは、知しらなければならぬことがあります。それは、この世よの中なかのために働はたらいているものは、ひとり、人にん間げんばかりでなく、馬うまも、牛うしも、よく人にん間げんのためはたらに働はたらいているということです。

この、ものをいうことのできない、おとなしい、かわいそうな動物どうぶつを、心こころある人にん間げんは、憐あわれんでやらなければなりません。

いじめられるからといっていじめてはなりません。

太郎たろうと二郎じろうとは、よく、朝あさ起おきるときから、夜よる寝ねるまでの間あいだに、

幾たびということなく、けんかをしたかしれませんが、ほんとうにたがいに憎み合ったからではなく、かえって仲のいいめではありましたけれど、つねにいい争うのには、どちらか無理なところがありました。

お父さんは、どういったら、二人がおとなしくなるだろう。どんなお話をして聞かせたら、身にしみて聞くだらうと頭をなやましていられました。

あるときのこと、お父さんは、近所の人たちといっしょに、夜警をしていられました。なんといつても、まだみんなは、おちつくことができずにいました。そして、火事をどんなにおそれていたかしれません、夜警をしなれば、みんながおちついて、夜

も眠るねむことができなかつたからであります。

往來おうらいを見てみいますと、日ひが暮くれてからも、避難ひなんをする人ひとの群む

れがつづいて通とおりました。五人連にんづれになつたもの、三人連にんづれのも

の、また、二人ふたり、四人にんというふうに、いずれも、ぞうりをはいた

り、また、はだしになつたりして、わずかばかりの荷物にもつを負おつて、

男おとこも、女おんなも、ふうなどはかまわずに、たいていはまつたく逃にげ出だ

したままの着きの身み、着きのままで、一刻こくも早はやく、この怖おそろしい都みやこを

逃のがれて故郷こきようの方ほうへ帰かえろうとするものばかりでありました。そう

した群むれが、はや幾いく日にちつづいたことでありましよう。

なかには、手てを引ひかれて、もう歩あるけなくなつたのを、お母かあさん

やお父とうさんに、はげまさされて、とぼとぼとゆく小ちいさな子供こどももあり

ました。

この道みちを通とおつて、みんなは、汽車きしやの立たつ駅えきの方ほうへとゆくのでした。

「ほんとうに、気きの毒どくな人々ひとびとですね。」と、夜警やけいをしている近き所んじよの人たちが、その中なかでも、子供こどもを三人にんも四人にんもつれて、みすぼらしいふうをして、さも疲つかれたようすで歩あるいてゆく家族かぞくのものを見みましたときにいいました。

「休やすんでおいでなさい。」

「おむすびも、お菓子かしもありますから、めしあがつておいでなさい。」

夜警やけいをしていた、太郎たろうのお父とうさんや、近所きんじよの人たちは、口くちぐ

々にこういいました。

すると、疲れた家族のものは、こちらを向いて、ちよつと躊躇しました。躊躇しましたが、ついに立ち止まって、

「どうぞ、おむすびを一つ子供らにやってください。」と、父親らしい人がいいました。

「さあ、さあ、たくさんありますから、みんなめしあがってください。」と夜警の人々はいつて、盆を持ってきて差し出しました。

子供らは、腹が減っていますので、みんなおむすびを喜んで食べました。

やがて、その人たちは、厚くお礼をいつて、また道を歩いてゆ

きました。

「あんなような子供こどもがあつては、汽車きしやに乗のるのが、どんなに骨おほねりだかしれません。」

彼かれらの去さつた後あとで、みんなは、その人ひとたちの停車場ていしやばに着ついてから先さきのことなどを想像そうぞうして同どうじよう情じやうしたのであります。

昼ひるから、夜よるとなく、つづいた避難ひなんする人ひとたちの群むれも、さすがに、真夜中まよなかになると、いずれも、どこかに宿やどるものとみえて、往お来らいがちよつとの間あいだはとだえるのでした。

そら、あお空そらを仰あおぎますと天あまの川がわが、下界げかいのことを知らぬ顔かおに、昔むかしながらのまままで、ほのぼのと白しろう流ながれているのであります。

「もう、何時なんじごろでしようか。」

「二時をすこし過ぎました。」

あたりは、しんとしていました。このとき、あちらから、山やまに荷物にもつを積つんで、荷馬車にばしゃがやってきました。

その荷車にぐるまを引ひいているのは、白い馬しろうまでありました。そして、先さきに立たつて、手綱たづなを引ひいている男おとこは、体からだのがっしりした大男おおおとこでありました。馬うまも、男おとこも、だいぶ疲つかれているように見みえたのであります。

太郎たろうのお父さんとうは、これを見みて、

「どこからきたのですか、よほど、遠とほいところからきなされたとみえますね。」と、やさしく声こゑをかけられました。

ゴト、ゴトと重おもい荷車にぐるまを馬うまに引ひかせてきた男おとこは、手綱たづなをゆる

めて立ち止まりました。

「横浜よこはまから、今日の昼きようひるごろ出でかけてまいりました。これから、もう一里りも先さきへゆかなければなりません。馬うまもだいぶ疲つかれています。」と答こたえました。

「そうとも、ここから横浜よこはままでは、十里りあまりもありますからね。」

「六郷ごう川の仮橋かりばしを渡わたつてきなすつたのですね。」

「ええ、そうです。また、この荷物にもつを下おろして、すぐこんやに、今夜のうちに帰かえるつもりです。」と、馬うまを引ひいてきた男おとこはいいました。

「また、遠とおい道みちを帰かえるのですか。」

「あすの晩ばん方がたに、あちらへ着つきます。そして、あさつては一日いちにち

馬うまを休やすめます。」と、男おとこは、答こたえました。

夜警やけいの人々ひとびとは、この話はなしを聞きいて、人間にんげんも、馬うまも、どんなに疲つかれることだろうと思おもいました。

こんなことは、平常ふだん多くあることではありません。汽車きしゃが通とおつていれば、汽車きしゃで運搬うんぱんされるのです。こうした、変事へんじがあつたときは、みんなが助け合あつたり、骨ほねをおらなければならぬのであります。

おとこ

男おとこは、また、手綱たづなを引ひいて、ゆこうとしました。すると、馬うまは、

もうだいぶ疲つかれているものとみえて、じつとして、歩あるこうといたしませんでした。もつとこうして、休やすんでいたいと思おもつたのであります。

しかし、いつまでも、男はおとこそうしていることができないのを知つています。休やすめば、休やすむほど、疲つかれは出でてきて、だんだん歩あるけなくなるものだからです。

「ど、ど、さあ、歩あるくだ。」と男おとこは、馬うまを心こころからいたわるように、やさしくいいました。

このとき、男おとこは、けつして、馬うまをしからなかつたのでした。ひとり人にんげん間まだけではなく、馬うまでも、牛うしでも、感かんじよう情じやうを解かいするものは、しかるよりは、やさしくしたほうが、いうことをきくものです。

馬うまは、また、重おもい荷にぐるま車まを引ひいて歩あるいてゆきました。

「こんなときは、馬うまもなかなか骨ほねおりだ。」と、そのとき、太たろう郎ろう

のお父さんとうといっしよに夜警やけいをしていた人ひとたちは感じたかんのであります。

翌日よくじつのことでした。太郎たろうと二郎じろうとが、またちよつとしたことから、けんかをはじめましたときに、お父さんとうは、昨夜ゆうべ見た、あわれな子供こどもらや遠いところとおから歩いてきた馬うまの話はなしを二人ふたりにしてきかされました。

「かわいそうな人ひとたちのことを思おもつたら、けんかどころではないだろう。」と、いわれましたときに、二人ふたりは、ほんとうに感心かんしんをいたしました。

太郎たろうと二郎じろうは、自分じぶんのいままで読よんでしまつて重ねておいた雑誌ざや、書物しょもつや、またおもちゃなどを不幸ふこうな子供こどもたちにあげたい

とお父さんとうに申しましたもう。

「それは、いい考えかんがだ。」とお父さんとうはうなずかれました。そして、二人ふたりは、またお父さんとうに向かむって、

「白しろいお馬うまは、もうお家うちへ帰かえったでしようか。」と兄きょうだい弟だいは、一日いちにちの間に幾いくたびも思い出だしては、聞きいていたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

底本の親本：「ある夜の星たち」イデア書院

1924（大正13）年11月

初出：「童話」

1923（大正12）年11月

※表題は底本では、「子供《こども》と馬《うま》の話《はなし

》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供と馬の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>